

図版解説

菊池容斎《観音経絵巻》

塩谷純

本稿ではパリ、フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France) の東洋写本部が所蔵する菊池容斎筆《観音経絵巻》を紹介する。幕末から明治初期にかけて活躍した画師、菊池容斎 (一七八八―一八七八) については、近年、近代歴史画の祖として注目され、その回顧展にともない作品も知られるようになってきている⁽¹⁾。しかし本絵巻については同図書館のホームページで概略が示され、また日本でも平成元年 (一九八九) に『秘蔵浮世絵大観』中のテキストで小杉恵子氏が言及するものの⁽²⁾、その図版とともに全貌が紹介されるのはこれが初めてとなるはずである。

絵巻の概要

本絵巻は、フランス国立図書館東洋写本部が管理するスミス・ルスエフ・コレクションのうちの一点である。スミス・ルスエフ・コレクションとは一九世紀パリの資産家アレクサンドル・オーギュスト・ルスエフ (Alexandre-Auguste Lesouff 一八二九―一九〇六) が蒐集した膨大な書籍・写本・版画のコレクションで、ルスエフの死後、その相続人であった妹のスミス夫人の遺志を継いで一九一三年に同夫人の二人の娘が国に寄贈したため、この名となった⁽³⁾。一八八六年に刊行された中国書籍のカタログに記載されていることから、ルスエフはそれ以前に本絵巻を入手したものと考えられる⁽⁴⁾。

当図書館で Kannon-gyô emaki (観音経絵巻) として登録されている本絵巻は、箱表に「普門品書画 菊池容斎筆／御巻物 二軸」と墨書された一重箱に収められる。二巻あり、外題に「普門品 上巻」とある上巻は本紙寸法縦三三・二センチ×全長一二・九四・四センチ、「普門品 下巻」とある下巻は縦三三・二センチ×全長一二・

七九・〇センチで、いずれも絹本、基本的に金泥で記された『法華経』普門品《観音経》の経文と交互に画面が展開する形式をとる。以下、巻頭より各画面について見ていくことにしよう。上巻をⅠ、下巻をⅡとし、各巻頭より画面毎に番号をふった。以下の記述中、番号の下には画面に該当する『法華経』普門品の経文の範囲を「Ⅰ」内に示した。

Ⅰ 上巻

Ⅰ―1

右端に金字で「補陀洛伽山全図」と記され、観音霊場として知られる中国・普陀山の全容が濃彩によって描かれる。本来、補陀洛伽山とは『華嚴経』入法界品における善財童子歴参の説話中、観音菩薩の居所とされる場所を指す。しかし海上交通の要衝に位置する普陀山は『法華経』普門品に説く海難救済の守護者としての観音に対する崇敬も少なくなく、『華嚴経』と『法華経』の所説が混在し、重なり合う信仰の場であったという⁽⁵⁾。

本図様は海上に浮かぶ同島を東側から俯瞰した景で、上方には墨書にて島内にある五十二の地名が逐一記されている (挿図Ⅰ)。容斎が普陀山へ赴いたという記録はなく、何らかの絵図に基づいて本図を描いたと考えられるが、緑青と群青が入り組み、あたかも海綿のような形状を髣髴とさせる土坡の表現は、山塊のマッスの表出に適した青緑山水の範を越える異色の景といえよう。

Ⅰ―2

円相の中、左手に青い水瓶を持ち跏趺正対する白衣観音が描かれる。観音の肉身は金泥にて彩色される。

Ⅰ―3、「妙法蓮華経／観世音菩薩普門品／爾時無尽意菩薩 (中略) 皆得解脱」

霊鷲山一会の場面。双樹の間に座す釈迦が無尽意菩薩に観世音菩薩の功德を説く。巻頭に描かれた普陀山と同様の、緑青と群青の入り乱れた土坡が目を引き。无尽意菩薩の色鮮やかな衣に金泥であしらわれた文様もまた精緻である。

I-4、「若有持是（中略）威神力故」

火難救済の場面。家財道具を持って夜闇を逃げ惑う町民、金色の慈雨により難を逃れた老親を背負う武士、そして業火と黒煙に包まれる町家が描かれている。混乱に陥った群衆を覆う薄墨の闇の中、白く塗り残された提灯ばかりが浮かび上がるさまは印象的である。

I-5、「若為大水所漂（中略）即得浅処」

水難救済の場面。崩落した大橋の上から川面へと落下する群衆を、観音が大きな蓮弁によつて救い上げている。観音と蓮弁を金泥のみによつてあらわし、それらが俗眼には不可視であることを示す。大橋を河岸から手前へ遠近法を用いて迫り出すように描いているのも注目される。

I-6、「若有百千万億衆生（中略）名観世音」

黒風羅刹難救済、すなわち経文によれば、宝を求めて羅刹鬼の国に漂着するも観音の名号を称えることで難を免れる場面である。岩礁や土坡に海綿のような複雑なフォルムが見られるが、巻頭の普陀山のような青緑の濃彩は施されていない。

I-7、「若復有人（中略）而得解脱」

刀杖難救済、すなわち竹藪を背景に賊が刀を抜いて婦女を襲う場面と、その刀が段々に折れ、悔悛した賊が自ら鬚を切ろうとする場面が連続して描かれている。

I-8、「若三千大千国土（中略）況復加害」

夜叉羅刹惡鬼難救済の場面。画面上方には髪を振り乱した夜叉の面容、そしてその見下ろす先には家屋の軒先が描かれる。他の場面と異なりほとんど描線を用いず、その朦朧とした画面は夜叉というモチーフと相俟って、夢幻的な妖気を漂わしている。

I-9、「設復有人（中略）即得解脱」

補陀洛伽山全図

- 1、青鼓雷
- 2、飛沙磬
- 3、香爐山
- 4、茶山
- 5、鎮海寺
- 6、菩薩頂
- 7、千步洞
- 8、摩尼洞
- 9、鷹崑
- 10、金栗庵
- 11、金蓮嶼
- 12、象崑
- 13、東天門
- 14、飢□嶺
- 15、三一巖
- 16、佛手巖
- 17、仙人井
- 18、金沙灘
- 19、太子塔

挿図1 補陀洛伽山全図 地名一覧

経文上は杻械枷鎖難救済、つまり無罪にもかかわらず枷や鎖につながれた人が救われる場面となるはずだが、この光景は省略され、経文の左横にある画面は次のI—10に掲げた経文に対応するので、そちらを参照されたい。

I—10、「若三千大千国土（中略）称其名故即得解脱」

経文は散らし書きされ、その内容である怨賊難救済は前段のI—9とI—10に描かれる。I—9では、山中で追剥に身ぐるみはがれた商人の観音に祈る姿があらわされる。墨線で樹皮の一枚一枚を括り出し、あたかも鰐のうろこを思わせるような樹幹の表現は、天保一四年（一八四三）に容斎が制作した《吕后斬戚夫人图》（静嘉堂文库美術館蔵）のそれに近い。I—10では経文の下絵として、無事に旅を続ける商人の一行が淡彩で描かれる。なお経文中、通例「怨賊」と表記される文言が「冤賊」と記されている。

I—20、「無尽意（中略）便得離欲」

愛欲からの解放を説く経文に対し、狂言「金岡」の一場面、絵師巨勢金岡と顔に絵具を塗られた妻を描く。美女に恋して物狂いとなった金岡に見かねた妻が、名人の夫の手で彩色すれば自分の顔も美女に劣るまいといって試みるものの、失敗に終わるというストーリーで、愛欲を戒める経文の内容を敷衍する画題といえるだろう。

I—21、「若多瞋恚（中略）便得離瞋」

舞楽の「還城楽」を描く。作り物の蛇を見つけて喜ぶ舞姿と瞋恚、つまり激しい怒りを観音の恭敬により鎮めるという経文の内容との間に接点は見出したい。ただし『御伽草子』の「還城楽物語」には、自分の妃を利用して隣国を領有しようと野望に燃える還城楽が登場し、あるいはそのような舞楽から派生した物語をふまえているのかもしれない。

I—22、「若多愚癡（中略）便得離痴」

能楽の「羽衣」より、漁夫白龍から天人へ舞の披露を約束に羽衣が返される場面

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|-----|----|------|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|------|----|-------|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|------|----|-----|
| 20 | 師子窟 | 21 | 普陀寺 | 22 | 放生池 | 23 | 龍湾 | 24 | 達摩峰 | 25 | 梵山 | 26 | 金剛窟 | 27 | 普同□ | 28 | 修竹菴 | 29 | 善財礁 | 30 | 司基湾 | 31 | 西天門 | 32 | 潮音洞 | 33 | 天窓 | 34 | 龍女洞 | 35 | 一葉扁舟 | 36 | 白華嶺 | 37 | 玉趣峯 | 38 | 不二石 | 39 | 總静室 | 40 | 白華峰 | 41 | 說法臺 | 42 | 三官堂 | 43 | 磐陀石 | 44 | 短姑道頭 | 45 | 二龜聽法巖 | 46 | 新□礁 | 47 | 育王院 | 48 | 法華洞 | 49 | 蓮華洋 | 50 | 鹿嶋 | 51 | 金鉢孟山 | 52 | 石牛港 |
|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|-----|----|------|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|------|----|-------|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|------|----|-----|

を描く。羽衣を返すにあたり、白龍は舞うことなく天へと上ってしまうのではないかと疑いはさむが、天人はそのような偽りは人間界ならはのものであると論す問答があり、その台詞が『観音経』中の「愚癡」と呼応すると思われる。

I-23、「無尽意（中略）観世音菩薩名号」

授産福子の場面。瓦屋根の屋敷、および藁葺の農家が俯瞰して描かれ、いずれも部屋の内には立てまわされた屏風や赤子等、出産とおほしき様子がうかがえる。農家の棟では男が丸い物体を投げ下ろしており、胞衣を娩出する後産の無事を願う⁽⁶⁾顛落⁽⁶⁾としての風習との関連を匂わせるが、描かれた物体が顛であるかどうかは不明である。

I-24、「無尽意（中略）施無畏者」

観音が衆生を教化する方便として、仏身から執金剛神に至るまで三十三の身分、階層の変化身となつて説法することを説くくだりで、他の絵入り観音経では各変化身を絵画化する場合が多いが、本絵巻ではそれらを一切描かず、下絵として冠や兜、薙刀等が墨描きされるばかりである。

巻末には白文方印「菊池武保」、朱文方印「定卿父」を捺す。

II 下巻

II-1、「無尽意菩薩（中略）能滅諸有苦」

観音が無尽意菩薩の供物である宝珠の瓔珞を二分し、釈迦と多宝仏の塔に奉る場面。中心となるべき釈迦を側面からとらえ、周囲に眷属を疎らに配するが、同じく釈迦を中心としたI-3と比べると構図にまとまりを欠く感は否めない。釈迦多宝仏塔供養の後、経文は偈頌に入る。

II-2、「仮使興害意（中略）火坑變成池」

偈頌では先に挙げられた危難救済が繰り返される。火坑に落とされても心に観音を念ずれば救われるというくだりで、本絵巻では老女によって囲炉裏に叩き落され

た子供が、倒れた薬缶より溢れた水から突如湧き出した蓮の葉に身を守られる場面、さらに農作業に勤しむ百姓に数珠を持った武士が畦道より声をかける場面が描かれているが、後者の点景描写が経文とどのような関係にあるのかは不明である。

II-3、「或漂流巨海（中略）波浪不能没」

巨海での漂流に遭う場面。暗雲漂う海へ向かい風をはらます舟の帆にはじまり、大時化の中荒波に容赦なくもまれる船体、そして危難を切り抜け無事帰帆するさまと三態が描かれる。時化の場面の船体や波の描法・構成は、『日蓮上人波題目之図』（静岡県立美術館蔵 挿図2）のそれと非常に近い。

II-4、「或在須弥峯（中略）如日虚空住」

筈に合羽姿の旅人が、断崖より真つ逆様に突き落とされている場面。

II-5、「或被惡人逐（中略）不能損一毛」

山峯より落下しても別状なしという内容においてはII-4と似るが、本図では遭難した女人がすでに谷底に着地し、事無きを得た姿で描かれている。

II-6、「或值怨賊繞（中略）咸即起慈心」

雪降る夜に強盗に襲われた邸宅を描く。雨戸の合間からは怯える母娘と、蹲って一心に祈る主人、そして二人の盗賊の姿がうかがえるが、土蔵をはさんで画面左端

の屋外では賊の一人が頭を抱えて逃げ去るさまがあらわされている。

II—7、「或遭王難苦（中略）刀尋段段壞」

後ろ手に縛り上げられた罪人を斬罪に処せんとするも、その刀が観音力により折れてしまう場面。

II—8、「或囚禁枷鎖（中略）釈然得解脱」

山道にて罪人を搬送する駕籠が転倒する場面。転がり出た罪人の足枷が外れている。

II—9、「呪詛諸毒藥（中略）還着於本人」

勾欄や御簾のある様子は貴族の邸であろうか、その一角で呪詛を執り行っていた僧侶が観音力により逆に報いを受けて卒倒している。護摩壇よりたちこめる黒煙の中には、金泥で小さな邪鬼が走り去る様が描かれている。

II—10、「或遇惡羅刹（中略）時悉不敢害」

一三匹の青龍が束となり、まるで一匹の大龍となったかのようにうねりながら画面左端へと飛び去っていく様子は奇怪である。右隅には斧を携えた男が龍に背を向けて跪き、手を頭上で合わせ祈っている。

II—11、「若惡獸圍繞（中略）尋声自廻去」

経文では惡獸および毒蛇、さそのりの類の害より救済される旨が説かれているが、本図では松の巨木の上で男が熊に追い詰められており、さらに大樹の下には二頭の狼が待ちうけ、蛇が地を這うさまが描かれている。

II—12、「雲雷鼓掣電（中略）応時得消散」

人物は一切描かれず、黒雲と数条の雨足ばかりが描かれる。

II—13、「衆生被困厄（中略）衆冤悉退散」

経文では生老病死等、諸々の苦勞から救われることが説かれるが、画面はとくに軍陣の恐怖から逃れるくだりを踏まえている。まず遠景として谷あいを取走る兵士が描かれ、続いて城内の俯瞰景、矢を射掛ける者や大砲を準備する者が描き出される。

II—14、「妙音觀世音（中略）阿耨多羅三藐三菩提心」

釈迦が衆生に『観音経』を説く光景。墨と金泥のみを用いて無数の頭光の群がりを描き、画面左方、その群れを見渡す位置に釈迦を後ろ向きであらわす。描写はやや粗放だが、説法する釈迦を背後からとらえる構成は仏画としては奇抜であり、あたかも魚卵のような数多の頭光が彼方まで広がるさまは壮観である。

画面はII—14で終了し、「天保戊戌」即ち天保九年（一八三八）の年記を有する容斎の自跋が続く。

南無佛庵老人於瞿曇氏之教也有不可思議者其□常聲色□味^{（真カ）}

未敢決然割愛經論偈頌未敢區々役慮而五十年來道俗貴賤莫不

信老人深於佛者如其感得乾竺銅像於異僧且得觀佛宇於

禁令既布之際又無師承而自得梵書之妙及歷世名僧海公以

下筆述人力不易致者偶然多歸其室余竊謂是非散聖之流亞則

高僧之再生耶老人年八十又三甲午之歲正月七日端坐示寂既而焚化之

得舍利數顆於灰燼中五色璀璨觀者驚嗟焉老人在日嘗托余使

作觀世音經相意在勸懲澆俗余隨喜諾之乃考之梵典漢籍參以今

世風俗不敢臆斷然亦不敢踏襲古圖是以頗稽緩焉老人既寂而圖未

完成要是余罪也於是晨夕勉勵數句畢功老人初意將手書經文於

圖上而今不能及則余代書之願其書畫凡劣雖不足以使衆生發三藐三

菩提心而揮灑之頃余自增益瞻仰頂禮之信心又將離貪瞋愚癡之

妄想是亦老人之惠也嗚呼爲知非大士自在神力即現老人身以說法於

末世耶天保戊戌夏六月

容齋居士武保盤諛識

自跋左端で絹が継がれ、継目をまたいで上巻と同じく白文方印「菊池容齋」、朱文方印「定卿父」が捺される。さらに別絹が継がれ、漢学者松田菰廬（一七八三—一八五二）の跋文が記される。松田菰廬は古賀精里の門下で高崎藩に仕えた人物。天保七年（一八三六）には容齋による歴史人物画伝『前賢故実』に序文を寄せ、その翌年には容齋が画を担当した「法教師之墓表」（真福寺蔵）碑文の書を揮毫している。⁽⁷⁾

容齋之於繪事佛菴之於内典宿

習天成至奇極妙傑出乎一時非

訥舌腐毫所能形容也余與容

齋交如乳水乃因容齋見佛庵

一見莫逆忘年忘言是益累劫

因緣豈唯同時聲應筆求之類

耶二子嗜文雅而余亦嗜焉余

恭敬大士而二子亦恭敬焉自餘

百事靡弗□合或一體之分身

乎雖然二子卓犖如彼而余頑

鈍如此魏國一龍之目不足爲之尾

諸葛三子之評僅當其狗可愧

已斯圖也佛菴發願焉容齋

成就焉余亦嘗書斯經數本

施之諸寺趣向全同隨喜殊深

不可以不跋斯図也

迂儒松田順之

署名の左横に白文方印「順之之印」、朱文方印「菰廬」が捺され、本絵巻は完結

となる。

絵巻の成立

本絵巻を概観したところで、次にその成立事情について跋文をふまえつつ述べることにしたい。天保九年（一八三八）の年記がある容齋自跋には、冒頭より「南無佛庵老人」なる人物が登場する。「甲午之歳」つまり天保五年（一八三四）の正月七日に、年八三にして示寂したというこの老人は、中村弥太夫仏庵（一七五一—一八三四）のことである。仏庵は幕府御量方の棟梁を務めた人物だが、書を能くし、また古物の収集家・考証家として知られている。⁽⁸⁾この自跋によれば「老人在りし日、嘗て余に托して観世音經を作らしめんとし、相意澆俗を勸懲するに在りて、余隨喜し之を諾す」とあり、仏庵から観音經制作の依頼を受け、喜んで引き受けたものの、「老人既に寂して、而るに圖未だ完成せず」、その生前に完成させることができなかった。「老人初意將に經文を圖上に手書せんとす、而るに今能はざるに及び、則ち余之を代書す」、当初經文は仏庵の手になるはずであったが容齋が代筆することとなった、とある。さらに松田順之の跋文にも「佛菴發願焉、容齋成就焉」と、発願者が仏庵であった旨が記されている。

仏庵と容齋は三十歳以上も年の開きがあるものの、松田順之が「莫逆、忘年、忘言」と記すほどに親しい間柄であったようだ。《観音經絵巻》では叶わなかったコラボレーションだが、仏庵生前の文政一三年（一八三〇）に容齋が龍頭観音を描き、仏庵が般若心經を書いた《龍頭観世音菩薩像》（個人蔵 挿図3）が伝えられている。すでに記したように仏庵は古物に通じており、寛政一二年（一八〇〇）刊行の松平

挿図3 菊池容齋《龍頭観世音菩薩像》 個人蔵

定信による『集古十種』編纂にも手を貸した形跡がある。⁽⁹⁾ 時代考証に則った『前賢故実』を著そうとする容斎にとつて、仏庵との交友は資するところ大であったにちがいない、同書の考証に用いた古物の写しをまとめて容斎没後に刊行した『前賢故実考証』（東陽堂 明治三十六年三月）一巻には、仏庵が所持していた「上古日月二十八日宿図縣物」の図を見出すことができる。本稿で紹介する『観音経絵巻』もまた、容斎の名著『前賢故実』に連なる好古のネットワークをうかがわせる一作といえるだろう。

絵巻の位置

最後に本絵巻の美術史的な位置づけを試みて、本稿の結びとしたい。

挿図4 円山応挙《七難七福図巻》 承天閣美術館蔵

容斎以前にも、『法華経』普門品（『観音経』）は幾度となく絵画化されてきた。古くは敦煌壁画から、日本でも正嘉元年（一二五七）の年記を有する『観音経絵巻』（メトロポリタン美術館蔵）をはじめとする諸例が知られており、とりわけ中国で印行された絵入りの版本は日本でも覆刻されるなどして、大いにその普及に貢献している。そのため諸難救済の場面は中国の風俗であらわされることが多かったが、大衆化の進んだ江戸時代の版本には、天保四年（一八三三）刊行の平田止水遺稿・菱川清春画『観音経和談鈔図会』のような、当時の日本の風俗で描き出した絵入本も見出せるようになる。⁽¹⁰⁾ 容斎『観音経絵巻』の図様も、そのような観音信仰の日本への浸透を前提にしているといえるだろう。

さらに本絵巻と中国版本に由来する絵入り観音経の諸本とを比較した場合、容斎本では観音が一切の衆生を救済すべく三十三身に応化する姿を描いた、いわゆる三十三応現身の画面が省略されている点が着目される。つまり諸本では応化した姿を描くばかりのステイックな表現を極力廃し、むしろストーリー性のある諸難救済の描写に主眼が置かれているのである。ここで想起されるのは、円山応挙が明和五年（一七六八）に完成させた『七難七福図巻』（承天閣美術館蔵 挿図4）の存在であろう。『七難七福図巻』は応挙のパトロンである円満院祐常の構想により、『仁王経』の説く七難七福を現世のものとして絵画化した作であり、とりわけ諸難にあえぐ当世人物の凄惨な描写は見る者に強烈な印象を与える。この『七難七福図巻』自体、絵入り『観音経』の諸難救済の表現を参照したことが想定されるが、その諸難を当世風俗へと仕立て上げ主要テーマにした点で、容斎の『観音経絵巻』と大きく重なり合っている。一説によると、『七難七福図巻』は寛政年間（一七八九～一八〇二）に光格天皇が愛玩して以来、近江にある円満院の外へ出すことを禁じられたと伝えられるが、一方で天保年間の模写も残されており、その存在が全く秘められたものでなかったことがうかがえる。⁽¹³⁾ 文政年間（一八一八～一八二九）に京畿に滞在し、寺社を回って『前賢故実』執筆のための資料収集を行っていた容斎にしても、『七難七福図巻』の画様を知り得た可能性は十分に考慮されるべきであろう。⁽¹⁴⁾ とはいえ容斎の絵巻中に『七難七福図巻』から直接剽窃をしたような跡が見られないのは、「応挙と己れの画と似て居る様に言ふものがあれど、両方共写生の筆

ゆへ似て居る様に見るかは知らぬが、我れ豈に応挙を似ぶものならんや」⁽¹⁵⁾との言が伝えられる容斎の面目躍如たるものがある。くわえて容斎画においては風俗描写の合間に、経文の内容と絡めて狂言や舞楽、能の場面を織りこむなど、その広範な教養の一端をのぞかせてもいる。蓋し、同じく天保年間に容斎が制作した大作『馮昭儀当逸熊図』『呂后斬戚夫人図』『阿房宮図』（いずれも静嘉堂文庫美術館蔵）も厄災という人の業を扱いながら、能うかぎりの考証を以て高踏的な歴史画へと昇華させた作であった。そうした構想力あふれる容斎壮年の画業をうかがう貴重な作例のひとつとして、『観音経絵巻』もまた数えることができるのである。

註

- (1) 菊池容斎についての基礎文献としては、結城素明「勤王画家菊池容斎の研究」『双杉会誌』一一三 昭和一〇年六月）が突出している。近代歴史画の祖としての位置づけについては、拙稿「菊池容斎と歴史画」『国華』一一八三 平成六年六月）を参照。また平成一一年一〇月二四日から一二月五日まで練馬区立美術館にて「没後一二〇年・菊池容斎と明治の美術」展が開催、その折の図録も容斎の画業を概観するものとして参照されたい。
- (2) 小杉恵子「パリ国立図書館東洋写本室の浮世絵」『秘蔵浮世絵大観八 パリ国立図書館』講談社 平成元年一二月）
- (3) スミス・ルスエフ・コレクションについては、註2前掲論文の他、ヴェロニク・ペランジェ「フランス国立図書館の和古書」『国立国会図書館月報』四八〇 平成一三年三月）、Véronique Béranger, "Les Recueils illustrés de lieux célèbres (meisho zue), objets de collection: Leur réception dans les milieux de la Société des études japonaises à travers l'exemple de la collection d'Auguste Lesouéf (1829-1906)," *EBISU-Études japonaises* 29 (automne-hiver 2002)を参照。
- (4) Kosugi Keiko "Inventaire des pièces hors catalogues du fonds Smith-Lesouéf japonais de la Bibliothèque nationale de France," *Le Vase de bérty: études sur le Japon et la Chine*, Picquier, 1996
- (5) 井手誠之輔「図版解説 長野・定勝寺所蔵 補陀洛山聖境図」『美術研究』三六五 平成八年一〇月）
- (6) 甌とは米や豆を蒸すために用いられた、底に穴の開いた土器のこと。甌落としの風習については、斉藤研一「子どもの中世史」(吉川弘文館 平成一五年三月)を参照。

- (7) 「法教師之墓表」については、相澤正彦「飯田家所蔵の菊池容斎書画類」(『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』一三 昭和六二年三月)を参照。
- (8) 中村仏庵については、ロバート・キャンベル氏による左記の一連の研究を参照。「中村仏庵の文事(一)―柳原邸の文物集散と交遊」(和漢比較文学会編『江戸小説と漢文学』汲古書院 平成五年五月)
- 「中村仏庵の文事(二)―職人家歴の辞藻」(『語文研究』七四 平成四年十二月)
- 「吉原考証の雅と俗―中村仏庵の文事(三)―」(『雅俗』一 平成六年二月)
- 「すみだ郷土文化資料館蔵『清暉園図記』解題と翻印―中村仏庵の文事・その四」(『語文研究』八六・八七 平成一一年六月)
- また仏庵の書家としての事蹟については、横倉佳男氏の次の論考を参照。
- 「書家としての中村佛庵 一 隷書碑を中心に」(『若木書法』二 平成一五年三月)
- 「書家としての中村佛庵 二 学書とその門流」(『若木書法』三 平成一六年三月)
- (9) 註8前掲、ロバート・キャンベル「中村仏庵の文事(二)―職人家歴の辞藻」
- (10) 江戸時代の観音経版本については、檜崎宗重「新出絵相観音経の研究」(『国華』七一一 昭和二六年一〇月)を参照。
- (11) 『七難七福図巻』と絵入り観音経の関わりについては、馬淵美帆「円山応挙筆『難福図巻』と『観音経』・観音経絵―出相観音経を中心に」(『美術史論叢』一九 平成一五年二月)を参照。
- (12) 金子静枝「円山応挙」(『少年世界』三一七 明治三〇年八月)
- (13) 天保一一年(一八四〇)の奥書をもつ島崎玉淵による模写が伝えられる。栃木県立美術館・滋賀県立近代美術館「小泉斐と高田敬輔」展図録(平成一七年二月)を参照。また幕末・明治期に活躍した円山派の画家、森寛斎にも『七難七福図巻』の模写が存在する(綿田稔氏の)教示による)。
- (14) 文政年間の、京畿における容斎の足跡については、註1前掲展覧会図録の塩谷純編「菊池容斎関連事項年譜」を参照。たとえば文政一三年(一八三〇)刊行の『平安人物誌』には、「源武保・四條東洞院東寓西村氏・東容斎」の記載が見える。
- (15) 「渡辺省亭氏の談(菊池容斎の画風)」(『太陽』四一四 明治三一年七月)

謝辞

本稿は平成一六年度文部科学省在外研究、および文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本近代の造形分野における「もの」と「わざ」の分類の変遷に関する調査研究」

(課題番号一四〇二二三四一)の成果です。作品の調査にあたっては、フランス国立図書館東洋写本部のモニーク・コーエン氏 Mme Monique Cohen、小杉恵子氏、ヴェロニク・ペランジェ氏 Mme Veronique Béranger の高配を賜り、またフランス国立東洋言語文化研究所のクリストフ・マルケ氏 M. Christophe Marquet に助言をいただきました。本稿執筆に際しては、平成一三年に本絵巻の調査を行なった練馬区立美術館の野地耕一郎氏による調書を参考にさせていただき、また武蔵大学非常勤講師の斉藤研一氏、町田市立国際版画美術館の佐々木守俊氏、東京文化財研究所の津田徹英氏のご教示を賜りました。右の方々に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。

図版要項

一一一

菊池容斎 観音経絵巻 (原色刷)

フランス国立図書館蔵

上巻 絹本着色 卷子装 縦三三・二 cm 全長一二九四・四 cm

下巻 絹本着色 卷子装 縦三三・二 cm 全長一二七九・〇 cm

一一一 塩谷純「菊池容斎《観音経絵巻》」参照

十二

黄二南 舌画 竹石図 (原色刷)

香港 黄仲方氏蔵

紙本墨画 掛幅装 縦一六六・四 cm 横七八・七 cm

十一 鶴田武良「黄輔周の舌画―民国期絵画資料―」参照